

現代ギリシヤ語の 空間指示表現について

橋 孝 司

現代ギリシヤ語で、空間における対象の位置をある基準点から相対的に「上方」「下方」等々と定位して表現するには、二つの形態素の連続を用いる。

(1) *Υπάρχει ένα βιβλίο πάνω στο τραπέζι.* ¹⁾

「テーブルの上に本がある」

(2) *Ένα γατάκι κάθεται κάτω από τη καρέκλα.*

「椅子の下に猫が座っている。」

πάνω σε ²⁾・*κάτω από*の各々の最初の形態素 *πάνω*・*κάτω* は単独で副詞として機能し、二つ目の *σε*・*από* は前置詞として機能する。このように、現代ギリシヤ語の相対的な空間指示表現は、副詞+前置詞という連続した二つの形態素によってなされる点で、単純な前置詞 *επί*・*κατά* などで空間指示を行っていた古代ギリシヤ語と大きく異なっている。

ところで、これらの空間表現において、副詞が全て *σε*・*από* のいずれとも結びつく訳ではない。ある副詞は *σε* と、別の副詞は *από* と結合し、他のものは両者と結合し得る。それでは、いかなる副詞がいずれの前置詞をとり、両者と結びつく場合には、どのような違いがあるのだろうか。

まず関本至氏著『現代ギリシヤ語文法』を見てみよう。その「前置詞」の章³⁾で、空間表現に関して述べられていることをまとめれば、以下のようになる。

(A) *σε* と結びつく副詞
μέσα, πάνω, κοντά

(B) *από* と結びつく副詞
πίσω, κάτω, πάνω, μετά, ύστερα, κατόπιν, έξω, μέσα, εδώθε, πέρα, μακριά

(C) *σε* と *από* とともに結びつき意味上区別のない副詞
μπροστά, απέναντι, ανάμεσα, γύρω

本稿では、これらのうち、「上方」「下方」「前方」「後方」「内部」を示す副詞に限って、論じていくことにする。

(A)・(B) とともに含まれている副詞に *πάνω*・*μέσα* がある。(C)の場合と異なり、

σεをとるか απόをとるかによって意味が異なるが故に、このように分類されたのだと思われる。

μέσα「内部」の場合、σεと結びつくと Inessive-Illative (内部における存在・運動-内部への移動)の意味になり、απόと結びつくと Elative (内部からの移動)の意味を持つ。

(3) Κι έμεινα μεσ' στο χιόνι. 2)

「そして私は雪の中にいた」

(4) Οι χυμοί κυκλοφορούσαν αθώρητοι μέσα στους γυμνούς κλώνους.

「樹液が、外から見えることなく、裸の枝の中部を循環していた」

(5) τάβαλα μέσα στο συρτάρι.

「私はそれらを引出しの中に入れた」

(6) Βγήκε μέσα από το σπίτι.

「彼は家の中から出た」

これらの μεσά σε / από の意味は、σε・από のそれぞれの基本義 Locative-Alliative (場所における存在・運動-場所への移動)、Ablative (場所からの移動)と平行している。

これに対し、πάνω「上方」の場合、σεと από の選択は Mackridge (1985, p.210) に端的に述べられているように、対象と定位の基準点との間の「接触」の有無であると思われる。

Cf. πάνω σε "above and in contact with" with πάνω από "above and no in contact with"

対象がある場所(基準点)に接触している場合は σε が用いられる。

(7) Είχε κι αυτός πάνω στα γονατά του το περίστροφό του.

「彼も、ひざの上に拳銃を載せていた」

(8) Το γάλα είχε χυθεί πάνω στα ρούχα.

「牛乳が衣服の上にこぼれていた」

(9) Σκουντούφλησαν πάνω στα κουφάρια.

「彼らは骸骨の上でつまづいた」

上例において、「拳銃」と「ひざ」、「牛乳」と「衣服」、「彼ら」と「骸骨」との間にはなんらかの接触がある。

他方、接触を欠いている場合には από が用いられる。

(10) Ιρακινά αεροσκάφη πέταξαν πάνω από πέντε ιρακικές πόλεις.

「イラク軍機が五つのイランの都市の上を飛んだ」

(11) Η κυρία ζει μόνη σ'ένα παράξενο παλιό σπιτάκι,
σ'ένα λόφο πάνω από τις σιδηροδρομικές γραμμές.
「その婦人は線路の上の丘の奇妙な古い家に一人で暮らしている」

(12) Πάνω από ολόκληρο το σπίτι και τη λίμνη πλανιόταν
μιά αλλόκοτη ατμόσφαιρα.

「家全体と湖の上を妖気が舞っていた」

これらの例において、「飛行機」と「都市」、「丘」と「線路」、「妖気」と「家・湖」の間に直接の接触はない。この点は、πάνω απόを用いて数値を示す場合に明瞭に表れる。例えば、

(13) Εκείνοι που είναι πάνω από είκοσι χρονών

は「二十才以上の者」ではなく、「二十才を過ぎた者」である。つまり、この前置詞句の意味には、「上方」を定位する基準点（ここでは「二十才」）が含まれておらず、それを除いた「上方」（この場合「より高い年齢」）が意味されており、上例で「都市」「線路」等が前置詞句の示す意味範囲に含まれていないのと類似している。

このように πάνω と結合した場合、前置詞 από のもつ基本義 Ablative 「ある位置からの移動」は、「ある位置から移動した結果としての分離状態」として把え直されている。ただし、必ずしも実際に移動が行われた必要はなく、あたかも、移動した結果現在の状態に至ったかのように言語的に表現されているのである。

さて、πάνω において、両前置詞の選択基準はほぼ明らかとなったが、この基準が当てはまるかどうか曖昧な例も見られる。

(14) Το βλέμμα του καρφώθηκε σε μιά περίεργη σιλουέτα
σκυμμένη πάνω σ'ένα κουφάρι.

「彼の視線は、死体の上にかがみこむ奇妙な影に釘付けになった」

(15) Μ'ένα δαυλό στο δεξί χέρι είχε σκύψει πάνω απ'το
πρόσωπο ενός νεκρού.

「右手に松明を持って、死体の顔の上にかがみこんでいた」

(16) Ανασήκωσε απ'τους ώμους το μπλέ κιμονό πούφερε πάνω
απ'το φιλό του πουκάμισο.

「彼は薄いシャツの上に着ていた青い着物を肩から引き上げた」

(17) Τώρα λανσάρει νέα μόδα, φορώντας καλσόν πάνω από
την αθλητική της αμφίεση :

「彼女は今、競技用の衣装の上でストッキングをつけて、ニュー・モードを披露する」

(14)と(15)は、動詞が同じであり、上述の基準の上ではそれほど差異があるとは思われないのに、前置詞が異なっている。また(16)・(17)では、物理的には各衣装の間に接触があると思われるのに、πάνω από が用いられている。これらをどう説明するか

は今後の課題である。

次に、「上方」に対して「下方」の表現法はどのように行われるのか見てみよう。先の表によれば、κάτω は από とのみ結びつくとされていた。

(18) Σάλεψε τα χείλια της που είχαν διπλωθεί κάτω
απ'τη μύτη της. [18E1]

「彼女は鼻の下で折り重なった唇を動かした」

(19) Κανείς άλλος δεν βρισκόταν κάτω απ'τη μεγάλη πύλη·

「他の誰も大きな門の下にはいなかった」

これらの例において、対象（「唇」「誰か」）と定位の基準点（「鼻」「門」）との間に接触はない。この点はπάνω απόと同じである。他方、対象が基準点の「下方」に接触している場合は、どのように表されるのだろうか。例えば帳面の下に直接置かれた新聞を指して言う場合は、

(20) η εφημερίδα κάτω από το τετράδιο

「帳面の下の新聞」

となる。つまり、「下方」の表現では、接触の有無にかかわらず、つねに από が選ばれるようである。

では、κάτω σε という連続は何を意味するかということ、関本氏の前掲書では、次のように述べられている。

「κάτω στη(ν) σκάλα」下の方、階段で；この例は、複合前置詞ではなく、単なる副詞と前置詞が並んでいるだけである。51」

この点を、以下の例を使って、意味論的な角度から考えてみよう。

(21) Κυλίστηκαν κάτω στα χώματα.

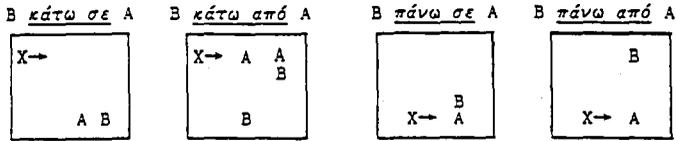
「それらは下の地面を転がった」

(22) ο σπόρος της νέας ζωής ··· κρυμμένος κάτω από το χώμα

「地面の下に隠れている新しい生命の種子は・・・」

(21)を見ると、κάτω で示される空間の位置と στα χώματα の位置が同じであるに気づく。「下方」を定位するためのある基準点（この例では明示されていない）から見て下の位置に「地面」がある。これに対し(22)の前置詞句の示す位置と το χώμα の位置は同じではない。ここでは基準点が「地面」であり κάτω από το χώμα の示す位置（＝「種子」の位置）はこれよりも下である。

以上のことを、πάνωの場合とあわせて図示しておこう。



X→ は定位の基準点

B πάνω σε / από, B κάτω από Aにおいては、Aが定位の基準点となるのに対し、B κάτω σε Aでは、A以外の(Aより上方の)ある位置に基準点が据えられている。

次に「前方」について見ておく。μπροστά「前方」は σε、 απόとも結びつき、意味に区別がないものに分類されている。

(23) μπροστά στην (または απ'την) πόρτα 6)

「戸の前で」

しかし、筆者がギリシヤ人に尋ねたところでは、何らかの微妙な違いがあるように思われる。例えば、ある新聞に掲載された写真 — 柵ごしに広島原爆ドームを眺める親子 — の説明文に、

(24) Μιά οικογένεια Ιαπώνων μπροστά στα ερείπια του κτιρίου — μνημείου στη Χιροσίμα.

「建物の废墟 — 広島記念碑 — の前の日本人家族」

と書かれてあった。これをμπροστά απόとするとどういうニュアンスになるか、という質問に対して、「その親子が、記念写真を撮るときのように、原爆ドームのすぐ前に立って、こちらを向いているような感じを与える。」という返事を得た。そうすると、対象(上例では親子)が基準点(上例では原爆ドーム)の方を向いている場合 σε が、向いていない場合 από が用いられるのだろうか。

しかし、筆者が新聞から収集した写真の中には、例えば、戦車の前に立って、正面(カメラのレンズの方)を向いた女優について、

(25) δεν παράλειψε να φωτογραφηθεί ... μπροστά σε τανκ.

「彼女は戦車の前で写真撮影も忘れなかった」

と説明されていたり、皇居に向かい、昭和天皇の病氣回復を祈る人々の写真に、

(26) Στη φωτογραφία Γιαπωνέζοι προσεύχονται γονατιστοί μπροστά από τα ανάκτορα.

「写真では、日本人が皇居の前でひざまづいて祈っている」

と添えられていたりして、上の仮説に対する反例が多く見出され、何かこれ以外の基準で使い分けられているようである。

他方、次の例では、 σε は使われない、という返事を得た。

(27) και έτσι ο Βρεττανός διατήρησε το αργυρό μετάλλιο των 100μ. μπροστά από τον Κάλβιν Σμιθ και πίσω από τον Λιούς.

「かくして、そのイギリス人選手は、カルビン・スミスの前、ルイスの後で 100mの銀メダルを確保した」

ここでは、対象（二位のイギリス人選手）を、ある序列関係の他の項目（三位、一位の選手）と比較して、それよりも前に、あるいは後ろに位置していることが述べられている。その際、απόはこの序列関係の中における比較の基準を示していると言えよう。実際απόは比較級とともに用いられて、比較の対象を表す。

(28) Εκείνος είναι πιά ψηλός από μένα.

「彼は私よりも背が高い」

μπροστάと結びついたαπόをこのように比較の基準をしてとらえた場合、先の反例(25)(26)等をもうまく説明できるかどうか、さらに検討が必要である。

いずれにせよ、μπροστά σεとμπροστά απόの意味は同じとは言えないようである。その例をもう一つだけ挙げておきたい。

ギリシャ語で「～を通る」と言う表現をする場合、もっとも一般的な動詞はπερνώだが、これと結びつくのは対格形の名詞ではなくαπό+名詞である。⁷⁾

(29) Πέρασε αργά από την άλλη άκρη της αίθουσας.

「彼女はゆっくりと広間の反対側を通って行った」

ところで、対象がある基準点の前方を通過した場合、μπροστά σεではなく、μπροστά απόが用いられる。

(30) Ένα ασθενοφόρο πέρασε μπροστά από το σπίτι μου.

「救急車が私の家の前を通った」

これに対し、対象がある基準点の前方で停止した場合はμπροστά σεが用いられる。

(31) Ένα ασθενοφόρο σταμάτησε μπροστά στο σπίτι μου.

「救急車が私の家の前に止まった」

こういった移動の動詞と副詞+前置詞の結びつきは今後の課題としておきたい。

最後に「後方」について簡単に見ておこう。πίσω「後方」はαπόとのみ結びつくと同類されている。この点に関して、また、πίσω σεの連続が副詞+前置詞の並列に過ぎない点でもκάτω「下方」の場合とよく似ている。次の文ペアを参照していただきたい。

(32) Εκείνος έτρεξε πίσω από το σπίτι του.

(33) Εκείνος έτρεξε πίσω στο σπίτι του.

(32)の意味は「彼は家の後ろへ走っていった」であるのに対し、(33)は「彼は家に走って帰った（例えば忘れ物を取りに）」である。さらに対象と基準点との接触の有無にかかわらず、つねにαπόが用いられる点もκάτωと同じである。例えば、鉄柵

の向こう側にしがみついて、こちら側（カメラの方）を見ている生徒たちの写真の説明は、

(34) Πίσω από τα κάγκελα οι μαθητές, μπροστά η Εισαγγελέας.
「鉄柵の後ろには生徒らが、前には検事が」

であった。

さて、これまで見てきた「内部」「上方」「下方」「前方」「後方」表現における前置詞の選択をまとめてみるならば、次のようになろう。

		Inessive / Illative	Elative
μέσα	「内部」	σε	από
		「接触」有	「接触」無
πάνω	「上方」	σε	από
κάτω	「下方」	—	από
μπροστά	「前方」	σε (?)	από (?)
πίσω	「後方」	από	

この表から明らかなように、「上方」「前方」が前置詞により細かに表現し分けられるのに対し、「下方」「後方」はそのような区別は無頓着である。また、「内部」は、これらとは異なった基準で前置詞を使い分けている。

このことは、人間の空間把握の非対称性と関連づけられるように思う。Lyons (1977) によれば、

In the up-down and front-back dimensions there is not only directionality, but polarity : what is above the ground and in front of us is, characteristically, visible to us and available for interaction ; what is beneath the ground or behind us is not. Upwards and frontwards are positive, whereas downwards and backwards are negative, in an egocentric perceptual and interactional space based on the notions of visibility and confrontation.

8)

空間定位表現が非常に対称的である日本語に比べてみるならば、ギリシヤ語ではこのpolarityがいかにはっきりと言語体系に反映されているかが理解されよう。

その他、未だ不明な点、本稿では扱わなかった他の前置詞の場合、さらに、移動の動詞との組合せなどについては、今後の研究において発表していきたい。

注

- 1) 本稿で掲げた用例は、筆者が小説・新聞・雑誌等から収集したものである。
- 2) σε は直後に冠詞を伴うとσとなり、στοのように続けて書かれる。例えば(1)の場合。
- 3) p.141ff.
- 4) μες' は μέσαのfree variation.
- 5) p.145
- 6) p.146
- 7) Τζαρτζάνου, (1946) p.186ff
- 8) p.691

参考文献

- Lyons, John (1977) Semantics vol.2 Cambridge Univ. Press.
Mackridge, Peter (1985) The Modern Greek Language Oxford Univ. Press.
Τζαρτζάνου, Α. Α., (1946 : 再版 1989) Νεοελληνική Σύνταξις. Α'. Θεσσαλονίκη
関本至 (1968) 『現代ギリシア語文法』大阪

補注

1) 本稿を書き終えて後、(18)について、μύτη「鼻」と χειλία「唇」との間に本当に接触はないのだろうかという疑問が生じた。ギリシャ語の χείλι は、口の周囲の赤い部分(日本語「唇」の指す部分)と鼻(顔面の隆起した部分)との間の箇所(口ひげをはやす部分)をも意味するかもしれないからである。いくつかの辞書を調べたところでは、「Χείλι」の項目の説明は、

"οι δύο πτυχές του δέρματος που κλείνουν το στόμα"
(Σ. Τσιούνη, Μεγάλο επίτομο λεξικό της ελληνικής γλώσσας [1986])

「口を閉じる・二つの皮膚のしわ」

"κάθε μία από τις σαρκώδεις πτυχές του δέρματος του προσώπου, με τις οποίες κλείνεται το στόμα"
(Α. Γεωργοπαπαδάκου, Το μεγάλο λεξικό [1988])

「顔の皮膚の肉質の各しわ。これによって口が閉じられる。」

"το πάνω και κάτω από τη σχισμή του στόματος

σαρκώδες μέρος" (A. X. Παναγοπούλου, Τπερλεξικό)

「口の裂け目の上下にある肉質の部分」

であった。すなわち、χείλι は、口の上下のしわのある赤い部分（日本語「唇」）のみに限られ、問題になっているそれより上の部分は含まないようである。（三つの説明のうち、最後のものはこの点曖昧であるが。）

ところが、「μoustάκι.」 「口ひげ」は

"οι τρίχες που φυτρώνουν στο επάνω χείλι των αντρών"
(Σ. Τσιούνη, ib.)

「男性の上唇に生える毛」

"τρίχωμα των ανδρών στο πάνω χείλι" (A. X. Παναγοπούλου, ib.)

「男性の上唇の毛」

と説明されており、口ひげに関する表現では χείλι は問題の部分を目指すようである。また、この部分にあるホクロを指して言う場合、厳密には

Αυτός έχει μιá ελιά πάνω από τα χείλια του.

「彼は唇よりも上にホクロがある」

であるが、日常的には次のように言うらしい。

Αυτός έχει μιá ελιά στο πάνω χείλι του.

「彼は上唇にホクロがある」

このように場合によっては、問題の、口ひげをはず部分が χείλι で表され得るのであれば、μύτη「鼻」との間には接触があり得る。したがって、(18) はここに掲げるのには不適切な例と言わざるを得ない。

Ο τρόπος έκφρασης χώρου στα Νεοελληνικά

Σ' αυτό το άρθρο μελετάμε την κατανομή των προθέσεων σε και από όταν συντάσσονται με διάφορα τοπικά επιρρήματα όπως : πάνω, κάτω, κτλ..

Βασιζόμενοι σ' αυτή τη κατανομή βλέπουμε ότι το σύστημα των εκφράσεων χώρου στα Νεοελληνικά δεν είναι συμμετρικό αλλά ασύμμετρο, που σημαίνει ότι καθρεπτίζει πιο άμεσα τον εγωκεντρικό μας τρόπο αντιλήψης του χώρου.

Επιπλέον θα συναντήσουμε μερικά παραδείγματα που αντιβαίνουν στους κανόνες της γραμματικής ότι δηλ. δεν υπάρχει σημασιολογική διαφορά μεταξύ των προθέσεων σε και από σε ωρισμένες σύνθετες εμπρόθετες φράσεις όπως : μποστά σε / από.